

## 日本語の不定語・重ね不定語の特性と複文の分析

### 要旨

日本語には「誰々・いついつ・どこどこ・なにになに」等、不定語を重ねた形である「重ね不定語」が存在する。しかし、その特性については今まであまり研究されてこなかった。そこで本論文では、意味内容の観点から複文を分類し、その中における重ね不定語のふるまいと接続の関係に注目して、単一不定語と比較をしながら重ね不定語の特性について考察した。その結果として、重ね不定語はプレースホルダー用法を持つ一方、疑問用法を持たないこと、文中には現れず「と」で接続される引用文に限り生起可能であるという特性があること、また埋め込み文中に「か」が使われない場合にのみ単一不定語と互換可能であるということを本論文では主張する。

九州大学文学部人文科学科  
言語学・応用言語学専攻  
平成 12 年入学  
1 LT00063K 熊丸 令  
平成 17 年 1 月提出

1. はじめに.....	1
2. 不定語の定義とその用法.....	1
2.1. 不定語の定義.....	1
2.2. 不定語の用法.....	3
3. 単文と複文.....	5
3.1. 単文における不定語の容認度.....	5
3.2. 複文における不定語の容認度.....	6
3.2.1. 連用節.....	6
3.2.2. 名詞節.....	7
3.2.3. 連体節.....	7
3.3. まとめ.....	8
4. 引用文.....	8
4.1. 間接疑問文的埋め込み節のパターン.....	8
4.2. 疑問文埋め込み.....	10
4.3. 疑問文に対する回答.....	11
4.4. 様態.....	12
4.5. 挿入句.....	14
4.6. まとめ.....	15
5. 引用文中の重ね不定語のふるまい.....	15
5.1. 疑問文埋め込みの場合.....	15
5.2. 疑問文に対する回答の場合.....	17
5.3. 様態の場合.....	17
5.4. 挿入句の場合.....	18
5.5. まとめ.....	18
6. 表から読み取れる重ね不定語の特性.....	19
7. 参考文献.....	22

## 1. はじめに

「誰・いつ・どこ・なに」は日本語の疑問語（不定語）であるが、それらが重ねられた形が文中に生起している場合がある。この重ねられた形の不定語についてはあまり知られておらず、先行研究はほとんどない。次の例は、状況説明とその状況を述べた文がそれぞれ対になっているものである。重ねられた不定語は単に繰り返されているだけ、と見られることもあるが、(2)(4)のように同じような埋め込み文でも単一の不定語と重ねられた不定語が互換できる場合とできない場合が存在する。

- (1) 様々な人に会うのが仕事のインタビュアーの妻花子の朝の口癖。  
花子：「ね、今日は誰に会うの？」
- (2) a. 花子は朝食のときにいつも、今日は誰に会う、と聞いてくる。  
b. \*花子は朝食のときにいつも、今日は誰々に会う、と聞いてくる。
- (3) 様々な人に会うのが仕事のインタビュアー花子の朝の話題。  
花子：「今日は来日したトム・クルーズに会うのよ」  
花子：「今日は新しい発明をした九大の先生に会うのよ」
- (4) a. 花子は朝食のときにいつも、今日は誰に会う、と言ってくる。  
b. 花子は朝食のときにいつも、今日は誰々に会う、と言ってくる。

互換できない場合がある、ということは「重ね不定語」には単一不定語とは異なる独自の特性が存在するはずである。本論ではその特性がどのようなものなのかを単一の不定語のそれと比較しながら考察していく。

論文の構成は、第2章では本論で用いていく不定語の定義とその用法について述べている。第3章では単文と複文という文の構造によって不定語の容認度が異なる、という事象を説明している。第4章では複文のなかでも引用文に注目し、意味内容による分類とその中における単一不定語のふるまいをまとめている。第5章で重ね不定語のふるまいを観察して表にまとめ、最後に第6章で重ね不定語の特性について表からわかることを考察している。

## 2. 不定語の定義とその用法

### 2.1. 不定語の定義

日本語の誰・いつ・どこ・なにといった単語は疑問表現で用いられ、疑問語と呼ばれ

ている。しかし、これらの単語は必ずしも疑問表現でのみ使われるというわけではない。

- (5) 誰がそのパーティーに行くの？
- (6) 誰かがそのパーティーに行く。
- (7) 誰もそのパーティーには行かない。
- (8) 誰でもそのパーティーに行く。

(6)のように疑問語が「か」を伴う場合、不定の対象の存在を表す。(7)のように疑問語が「も」と否定表現を伴う場合は対象の不存在を表す。(8)のように疑問語に「でも」がつく場合、任意の対象を表す。これらは益岡・田窪(1992:38-39)で述べられている。益岡・田窪はこれら疑問語に「か」や「も」や「でも」が伴った形を総称して「不定語」と呼んでおり、これらの語が不定の対象を指し示すとしている。しかし、益岡・田窪が述べていない日本語の現象として、次のような例がある。

- (9) 私は誰々がそのパーティーに来る、と発表した。
- (10) 私は誰がそのパーティーに来る、と発表した。

(9)では「誰々」という疑問語が重ねられた形が現れている。これについてはあまり今まで注目されておらず、他の疑問語や不定語と混同されがちであった。しかし発話の例などを検証していくとそれらとまったく同一の働きをしているわけではないことに気づく。(10)は発表された内容を表す埋め込み文の中に「誰」が表れているが、実際に発表されているのは具体的な人名である。ここでの「誰」は疑問語として使われているわけではなく、むしろ不定の対象を指し示している、と考えるほうが自然である。

(10)のように「疑問語」が疑問の用法として使われない場合は、疑問語と不定語が別個のものであるかのように扱われている益岡・田窪の不定語の定義では説明がつかない。また、(9)のような疑問語が重ねられた形についても包括することはできない。本論では、次のように不定語の在り方を定義し、不定語、特に重ね不定語の特性について考えていきたいと思う。

#### (11) 不定語の定義

不定語：不定の対象を指し示す語

- a. 単一不定語：不定語の中の「誰・いつ・どこ・なに」等の単語
- b. 重ね不定語：不定語の中の「誰々・いついつ・どこどこ・なにになに」等の単語

## 2.2. 不定語の用法

(12)(13)(14)は益岡・田窪に疑問語・不定語として扱われていたものをそれぞれ不定語の用法としてまとめたものである。

- (12) 不定語の疑問用法：疑問表現の中で使われ、WH 疑問文を作る。  
例：誰がそのパーティーに行くのか？
- (13) 不定語の用法（存在量化用法）：「か」を伴い不定の対象の存在を表す。  
例：誰かがそのパーティーに行く。
- (14) 不定語の用法（全称量化用法）：「も」を伴う。
  - a. 否定表現を伴う場合、対象の不存在を表す。  
例：誰もそのパーティーには行かない。
  - b. 格助詞を伴う場合、全称量化を表す。  
例：誰もが太郎の帰りを待ちわびた。

次に、益岡・田窪には触れられていなかった重ね不定語のふるまいについて考える。重ね不定語の現れる文脈を考えてみると次のようなものがある。

- (15) 花子：「今日は田中さんに会うかな？お歳暮のお礼をいってほしいんだけど」  
花子：「今日は山田さんに会うことがある？本を返したいの」
- (16) 太郎：「明日はカレーが食べたいな」  
太郎：「お昼はそうめんが食べたいな」

(15)(16)のような発言をする花子や太郎について述べるときは次のような表現を使うことができる。

- (17) 花子は僕がでかけるときに必ず、誰々に会うのか、と聞いてくる。
- (18) 太郎はいつもなにになにが食べたい、とはっきり口にする。

(17)(18)の例は引用であり、誰かの発言を記述したものである。ここで注目したいのはこれらの埋め込み節は発話時の発言そのものではない、という点である。(17)を例にとると、花子の実際の発話は具体的な人名をあげてあるものであり、「今日は誰々に会う？」というせりふを発話しているわけではない。また、(17)の例文は一度の花子の発話について記述しているものではなく、それぞれの事象について総括的に述べているものである。すなわち、ここに生起している重ね不定語「誰々」は「場合によって異なるそのときどきの誰かの具体的な人物名」が入る空所があることを示すプレースホルダー

の役割を果たしていると考えられる。また、この用法は他の重ね不定語についても同様のことが言える。以下はそれぞれ、状況とそれを表す重ね不定語の文の例である。

- (19) 編集者：「先生！今月は20日までにきっちり原稿書けますか？」  
編集者：「今月は締め切りが早くて15日なんですけど...書けますか？」
- (20) 編集者はいつも、いついつまでに書けるか、と確認する。
- (21) 花子：「出かけるなら郵便局に寄る？切手がきれてるの。」  
花子：「出かけるの？帰りにスーパー寄る？」
- (22) 花子は僕がでかけるときにしょっちゅう、どこどこに寄るのか、と聞いてくる。
- (23) 私：「お昼どう？」  
マリ子：「カレー食べにいくの？だったら遠慮する。」  
マリ子：「パスタ食べにいくの？だったらいこうかな。」
- (24) マリ子を昼食に誘うとまず、なになにを食べにいくのか、と聞いてくる。

以上のことから、重ね不定語の特徴として次のことを挙げることができる。

- (25) 重ね不定語はその場合によって異なる具体的な情報が入るための空所の存在を示すプレースホルダーの役割を果たす。

単一不定語の用法としても次のような場合がある。

- (26) 次郎はどこに集合するように、とみんなに連絡した。

(26)において次郎は「どこ」という場所に集合するように連絡したわけではなく、また、「どこに集合する？」という疑問を連絡したわけでもない。実際には「校門前」「改札口」といった具体的な場所を述べているはずである。「どこ」はその具体的な場所がそこで述べられていたことを示しており、やはり、プレースホルダーの役割を果たす。よって、不定語の用法として(12)(13)(14)に加えて次の(27)を挙げることができる。

- (27) 不定語のプレースホルダー用法：その場合によって異なる具体的な情報が入るための空所の存在を示す役割を果たす

### 3. 単文と複文

#### 3.1. 単文における不定語の容認度

単一不定語の場合、単文、複文、どちらの中にも現れても容認が可能である。

- (28) a. あなたは誰に会ったの？  
b. 花子が、あなたは誰に会ったのか、と僕に尋ねた。

いっぽう、重ね不定語の表れる文を考えると、単文の中に表れるか複文の中で表れるかによって容認度に差があることが観察される<sup>1</sup>。

- (29) \*あなたは誰々にあったの？

(29)の例文を実際に発話してみると文が途中で終わってしまったかのようなバランスの悪い違和感があることに気づく。これは、他の重ね不定語に関しても同じ現象が起こる。

- (30) a. \*いついつまでに原稿をしあげられますか？  
b. \*今日はどこどこへ行く？  
c. \*お昼はなになににする？

日本語の重ね不定語は実際の発話の中でこのような単文の中には現れることがない。これを、重ね不定語が埋め込み文の中に現れている場合、即ち重ね不定語の文が埋め込まれている場合と比較すると次のようになる。

- (31) a. \*いついつまでに原稿をしあげられますか？  
b. 編集者が、いついつまでに原稿を仕上げられるか、と作家に尋ねる。
- (32) a. \*今日はどこどこへ行く？  
b. 太郎が、今日はどこどこへ行くか、と僕に尋ねる。
- (33) a. \*お昼はなになににする？  
b. 花子が、お昼はなになににするか、と私に尋ねる。

---

<sup>1</sup> 重ね不定語が単文中に生起するとき、「誰々」を「複数の人」、「どこどこ」を「複数の場所」のように疑問用法の不定語の複数の場合として解釈される場合があるが、その容認度には個人差があるので、本論では扱わないものとする。

a.の例文と b.の例文を比べると、b.のほうが明らかに自然な形として容認度が高くなる。このことから、重ね不定語は単文の中に現れることができないということがわかる。

### 3.2. 複文における不定語の容認度

2.1.において、重ね不定語は単文の中には現れないということが観察された。それは複文である、ということは重ね不定語が文中に現れるための十分条件になるのである。重ね不定語が複文の中にあるのはどのような場合であるのかを観察する。野田・他(2002:10-11)によると、複文は文全体の構造の中でその節がどのような機能をもつ部分になっているかという観点から、次のように連用節、名詞節、連体節に分類することができる。

- (34) a. 述語を拡張する節：連用節
- b. 名詞に相当する節：名詞節
- c. 名詞を拡張する節：連体節

3.2.ではこの分類に従って、重ね不定語が生起可能かどうかを観察する。

#### 3.2.1. 連用節

連用節というのは、述語を拡張する節である。

- (35) 春になったらこの種をまきましよう。
- (36) 花子はカレーを食べたが僕はオムライスを食べた。

(35)は述語を限定して拡張した形、(36)は述語を並立して拡張した形である。このような文は複文ではなく、重文と呼ばれることもある。その言葉が示すとおり、連用節を含む文は二つの単文が接続されて一文になっていると考えることもできる。ならば、重ね不定語が入った場合には、単文の中に入った時と同様の違和感を覚えるのではないかと予想することができる。

- (37) \*いついつになったらこの種をまきましよう。
- (38) \*花子はなにになにを食べたが僕はオムライスを食べた。

(35)(36)の連用節に重ね不定語が入った場合、予想通り、単文に入れたときと同様に

違和感を覚える。(37)(38)のような文は、一見ありそうではあるが、実際にそれのみで発話されることはない。(37)(38)の違和感は、次のようにすることで解消される。

- (39) いついつになったらこの種をまきましよう、と保母さんは子供たちに言った。
- (40) 花子はなにになにを食べたが僕はオムライスを食べた、と弘は母親に報告した。

#### 3.2.2. 名詞節

名詞節は(41)(42)の下線部のように、その節全体が名詞の働きをしているものであり、「～こと」や「～の」「～か」というかたちになっている。

- (41) お風呂あがりにビールを飲むのがおいしい。
- (42) 息子はアメリカに行くことを夢見ている。

名詞節は埋め込み節と呼ばれることもある。重ね不定語は単文の中に表れない、ということから予想すると、埋め込み文であれば重ね不定語は表れうる、と考えることができそうである。しかし、(41)(42)に重ね不定語が入ると次のようになる。

- (43) \*お風呂上りになになにを飲むのがおいしい。
- (44) \*息子はどこどこに行くことを夢見ている。

埋め込み節である(43)(44)もやはり単独で発話されると考えるには違和感がある。この違和感は次のようにすることで解消される。(45)は(46)の例文が表している状況である。

- (45) 「お風呂上りはビールがいいわ、でも牛乳もおいしいし、それにジュースも…」
- (46) 知子は、お風呂上りになになにを飲むのがおいしい、と語った。
- (47) 息子はどこどこに行くことを夢見ている、とおばさんはいつも話す。

#### 3.2.3. 連体節

連体節は、(48)の下線部のように、名詞を限定して拡張するものであり、関係詞などとも呼ばれる。

- (48) バナナを入れた箱は右に並べてください。

名詞に述語がつく、という意味で名詞節と形としてはよく似ているので、やはり 3.2.2. のように重ね不定語は入ることができないと予想される。この下線部に重ね不定語を入れると次のようになる。

(49) \*なになにを入れた箱は右に並べてください。

予想通り(49)も発話しようとする違和感が残るが、次のように補うことで違和感は改善される。

(50) なになにを入れた箱は右に並べてください、と係員が指示を出す。

### 3.3. まとめ

3.2.1. ~ 3.2.3. では、主文に対する節の役割とその構造という観点から複文を分類し、その中における重ね不定語の容認度を調べた。その結果を見ると、重文・埋め込み文にかかわらず複文である、というだけでは重ね不定語が生起できる条件にならない、ということがわかる。それぞれの重ね不定語の例文は、「~と言った」というように引用文の形になることで初めて容認可能となっている。ここで、第2章のまとめとして次のことを必要条件として述べる。

(51) 重ね不定語が生起可能であるためには引用文である必要がある。

さまざまな引用文の中での振る舞いを観察することにより、重ね不定語の特性がさらに明らかになるものと思われる。

## 4. 引用文

第2章では引用文であることが重ね不定語が生起可能であるための条件であるということがわかった。引用文の中の重ね不定語のふるまいを観察するために、本章ではまず引用文にどのようなパターンがあるのかを分類し、またその際の単一定語のふるまいを調べて重ね不定語のそれに対する比較対象としていく。

### 4.1. 間接疑問文的埋め込み節のパターン

埋め込み節の接続のしかたと不定語の関係を考えてとき、問題になるのは間接疑問文

の存在である。間接疑問文とは、一般的には節が文中に complementizer 「か」を用いて埋め込まれた形であると考えられており、疑問文ゆえに不定語が使われることも多くある。

(52) a. 花子が、お昼はなににするか、と私に尋ねる。  
b. 花子が、お昼はなににする、と私に尋ねる。  
c. 花子が、お昼はなににするか、私に尋ねる。

(53) a. 花子が、お昼はなにになにするか、と私に尋ねる。  
b. \*花子が、お昼はなにになにする、と私に尋ねる。  
c. \*花子が、お昼はなにになにするか、私に尋ねる。

例文、(52)は単一定語が表れるグループ、(53)は節中に重ね不定語が表れるグループである。a.は complementizer 「か」「と」がともに文中に用いられているパターン、b.は complementizer 「と」のみが用いられているパターン、c.は complementizer 「か」のみが用いられているパターンとなっている。(52)ではどの例文の中に単一定語が入っても文が容認可能である。それに対し、重ね不定語の場合には(53b)(53c)は(53a)と比較したときに容認度が著しく下がっている。単一定語と違い、重ね不定語が容認されるためには、埋め込み節の接続のされかたも関わってくるようである。

疑問文の形をしているとはいえ次のような場合を考えると間接疑問文が全て、疑問文が埋め込まれたものであると言い切ることは難しくなってくる。

(54) 花子はいつ先生が来るのか、と発表した。  
(55) a. 花子はいつ先生が来るのか、と太郎に尋ねた。  
b. 花子はいつ先生が来る、と太郎に尋ねた。  
(56) 彼は悪いものでも食べたのか、顔色が悪い。

(54)の下線部は単一定語の入った文が complementizer 「か」で接続されている。しかしこれは発表された内容であり、ここで「疑問文」が発表されているわけではない。(55a)は尋ねた内容なので疑問の意味であると考えられるのであるが、(55b)では「のか」がない形でも接続は可能である。(56)の下線部には「か」が使われているが意味から考えると「悪いものでも食べたのだろう」と類推していると解釈するほうが自然である。これらの例を見ると、表面的に同じ間接疑問文に見えるものも、表す内容が同じであるわけではない、ということに気づく。

本論では、埋め込まれた文が complementizer 「か」「のか」でつながれているものを「間接疑問文的埋め込み節」と総称する。そして埋め込み文が表す内容という観点から

そのパターンを分類し、「と」に関する接続とさらに「か」が省略された場合の接続も合わせて調べていく。具体的には、次の四つの間接疑問文的埋め込み文について詳しく見ていくことにする。

#### (57) 間接疑問文的埋め込み節のパターン

- a. 疑問文埋め込み
- b. 疑問文に対する回答
- c. 様態
- d. 挿入句

それぞれのパターンについては次節で詳しく説明を述べることにする。

### 4.2. 疑問文埋め込み

(59)の例文は(58)の状況について述べたものである。

(58) 彼の発言：「その意見を言ったのは誰だ？」

(59) 彼はその意見を誰が言ったか(を)尋ねた。

(59)の下線部は、「彼」が実際に発言した疑問文の内容である。下線部は「を」接続が可能なので、名詞節として表れていると考えられる。情報に関するもので疑問の意味をもつ、または情報を求めるといった意味の動詞のグループがこの疑問文埋め込みの節を補語にとることができる。このような特性を「情報要求特性」と呼ぶことにする<sup>2</sup>。「聞く(ask)」「疑う」など質問や疑問に関する動詞が情報要求特性をもつ動詞のグループに入る。(60)より、埋め込み節の内容が疑問となるため、単一定語の疑問用法、もしくは complementizer「か」のどちらか(あるいは両方)が埋め込み文中に含まれている必要があるということがわかる。complementizer「と」は「か」がない場合にのみ文接続に必要であるが、「か」と共起することも可能である。

- (60) a. 花子は、いつ先生は来るのか、と尋ねた。  
b. 花子は、いつ先生は来る、と尋ねた。  
c. 花子は、いつ先生は来るのか尋ねた。

<sup>2</sup> 江口(1992:120)では情報のやりとり、欠如、不確定性などを表す述語が間接疑問節を補語に取ることができるとし、その意味特性を疑問節埋め込み特性と呼んでいる。

- d. 花子は、先生は来るのか(\*どうか)、と尋ねた。
- e. \*花子は、先生は来る、と尋ねた。
- f. 花子は、先生は来るのか(どうか)尋ねた。

(60b)には疑問の complementizer「か」が入っておらず、「いつ先生は来る？」と花子の発話をそのまま引用しているような印象を受ける。ここで complementizer「と」は節をより直接引用的に接続するという働きを持つと考えてみる。その考えに基づくと(60e)には疑問を示す不定語も「か」もないため、「尋ねる」という情報要求特性を持つ動詞の意味と埋め込み節が合わないので容認できない、と説明ができる<sup>3</sup>。

### 4.3. 疑問文に対する回答

(61)の状況を述べたのが(62)の埋め込み文である。

(61) 彼の発言：「その意見は、太郎が言ったのです。」

(62) 彼はその意見を誰が言ったか(を)発表した。

(62)の下線部は「誰が言ったか」という疑問文の形になっているが、「誰が言ったのか？」という疑問が発表されているわけではない。文の内容は、実際にはその疑問の回答に相当する「太郎が言った」という情報が発表された、ということを示す。このように、疑問文に対する回答の埋め込み文を補語にとることができるのは、知識の有無、獲得、消失に関する述語、推測、判断、決定に関する動詞である<sup>4</sup>。このグループの動詞としては「知る」「聞く(hear)」「教える」「暗示する」「明らかにする」などがある。(63)をみると complementizer「か」、もしくは complementizer「と」のどちらかがあれば埋め込みには十分である。

(63) a. 花子は、いつ先生は来るのか、と発表した。

<sup>3</sup> 「～してみる」と複合した動詞は情報要求特性を持つ。(例：カブトムシ取りのとき「カブトムシがいるかどうか木を蹴ってみた。’)この動詞はしばしば主文の動詞の目的語が埋め込み節中にあるという複雑な構文を作る(例：「スイカが甘いかどうかたいたしてみた。’)不定語のふるまいと節の接続を調べるのが目的であるので、本論では扱わない。

<sup>4</sup> 英語の場合、稲田(1089:114-115)は補部に疑問節をとる述語について、( )質問や疑問に関する述語( )知識の有無、獲得、消失に関する述語、( )推測、判断、決定に関する述語( )情報の不確定性に関する述語、( )情報の関連性、依存性に関する述語の5つに分類していた。

- b. 花子は、いつ先生は来る、と発表した。
- c. 花子は、いつ先生は来るのかを発表した。
- d. \*花子は、先生は来るのか(どうか)、と発表した。
- e. 花子は、先生は来る、と発表した。
- f. 花子は、先生は来るのか(どうか)を発表した。

埋め込み文の内容は疑問文に対する回答の情報である。(63a)のように complementizer 「か」を伴う場合は疑問語であり疑問文の形となる。この場合は上述したように「いつ先生が来るのか、その WH 疑問に対する回答」が動詞の指す内容となる。同じ疑問文でも(63f)のように埋め込み文が YES/NO 疑問文の場合には「先生が来るのか、その YES/NO 疑問に対する回答」が発表されていると考えられる。発表される内容は命題ではなく真偽の問題となる。(63d)が容認不可になっているのは、complementizer 「と」のみで接続されているので直接引用的な表現となっているためである。一般的に「先生はくるのかどうか?」という疑問は「発表」されることはないため、動詞の意味と合わなくなっていると考えられる。

(63b)の場合も、complementizer 「と」のみで接続されているので直接引用的であると考えると、疑問文である、という解釈は不自然である。実際に発表された内容は例えば「来週先生が来る」というような具体的なものである。すなわち、発表された内容は不定語「いつ」の部分に具体的な情報が入ったもの、という解釈ができるので、これは単一不定語のプレイスホルダー用法であると考えることができる。

#### 4.4. 様態

(64c)では「~の」という名詞節が容認されている。しかし(64a)(64b)では動詞「喜ぶ」において、単一不定語と complementizer 「か」を含む埋め込み文・complementizer 「か」のみを含む埋め込み文共に、「を」が入る場合は容認されない。ここから、これらの間接疑問文的埋め込み文は名詞節として働いていないことがわかる。また complementizer 「か」で直接接続する場合にも容認されない。

- (64) a. \*花子はいつ先生が来るのか(を)喜んだ。
- b. \*花子は先生が来るのか(を)喜んだ。
- c. 花子は先生が来るのを喜んだ。

次に complementizer 「と」が入る場合には次のようになる。

- (65) a. 花子は、いつ先生が来るのか、と喜んだ。
- b. 花子は、いつ先生が来る、と喜んだ。
- c. \*花子は、いつ先生が来るのか喜んだ。
- d. 花子は、先生が来るのか(\*どうか)、と喜んだ。
- e. 花子は、先生が来る、と喜んだ。
- f. \*花子は、先生が来るのか(どうか)喜んだ。

complementizer 「と」が入った文のみ容認可能になっている。埋め込み文の内容を考えると、これらの文が容認される状況を考える。以下は状況とそれを述べる例文が対になっている。

- (66) お世話になった家庭教師が今度うちを訪ねてくれると母親からきいた花子。  
花子：「ほんとう!? 嬉しいな、いついらっしやるの!?」
- (65a) 花子はいつ先生が来るのか、と喜んだ。

- (67) お世話になった家庭教師が今度うちを訪ねてくれると母親からきいた花子。  
花子：「まっ! 嬉しいな、先生がいらっしやるのね!」
- (65d) 花子は先生が来るのか、と喜んだ。

逆に、以下のような場合ではこれらの文は容認されない。

- (68) お世話になった家庭教師が今度うちを訪ねてくれると母親からきいた花子。  
花子：「本当? 嬉しいけれど、いついらっしやるの?」(疑問の気持ちが強い)
- (65a) \*花子はいつ先生が来るのか、と喜んだ。
- (69) お世話になった家庭教師が今度うちを訪ねてくれると母親からきいた花子。  
「あら、嬉しいけれど、本当に先生がいらっしやるの?」(疑問の気持ちが強い)
- (65d) \*花子は先生が来るのか、と喜んだ。

以上の状況から埋め込み文の内容を考えると、(65a)の埋め込み文は疑問文の形をとっているものの、疑問そのものよりも「どのように喜んだのか」という心理を描写する働きのほうが強い。(65d)は「先生が来る」という事実を知った上で喜んでいて、YES/NO 疑問文で疑問の気持ちが描写されているという解釈は非常に考えにくい。感嘆詞「か」がついた心理描写が引用されて埋め込まれている、と解釈するほうが自然なのではないだろうか。直接引用的な接続をする complementizer 「と」が必ず必要だという

事実も、心理描写が直接引用的に埋め込まれているという解釈を支持している。感嘆詞「か」には文をつなぐ役割はないので、埋め込まれるときには complementizer 「と」が必要になるためである。(65b)の場合が容認されるのは次のような場合である。

- (70) 花子：「やったあ！3日に先生がいらっしゃるのね！」  
 (65b) 花子は、いつ先生が来る、と喜んだ。

この場合、「3日」という具体的情報がわかっている状態で花子がどのように喜んでいのかを記述しているので、単一定語「いつ」はプレースホルダー用法であると考えられる。

このパターンの埋め込み文は連用節であり副詞的な役割をするため、様々な動詞を拡張することが可能である。

#### 4.5. 挿入句

次のパターンの例文は文中に「～か」の形が現れているという点では他の間接疑問文的埋め込み節と似て見える。しかし、挿入句として使われている場合、この間接疑問文的埋め込み節(文)は主文との関わりがなく、埋め込み部分を括弧でくくっても主文の意味が通る、というのが特徴である<sup>5</sup>。

- (71) a. ファンは誰に聞いたのかすでに出口に待機していた  
 b. \*ファンは誰に聞いたのかすでに出口に待機していた  
 (72) a. 彼は悪いものでも食べたのか顔色が悪い  
 b. \*彼は悪いものでも食べたのかと顔色が悪い

このパターンの場合「か」の後ろに complementizer 「と」が入ることができない。動詞に特に制限はなく、文脈によってあらゆる動詞がくることができる。

<sup>5</sup>庵功雄・他(2001:260-261)では「か」には出来事の内容を話し手が不確定視していることを表す用法がある、としている。「おかげか」「せいかなどがあるが、確定視しているときには「ので」「おかげで」「せいで」等の表現になることから、連用節である、と考えるのが妥当であるかも知れない。

#### 4.6. まとめ

3.1 で観察した埋め込み文の特性をまとめたものが次の表である。「容認度」は単一定語が文中にあるときに容認できるならば、その場合には単一定語がどの用法であるのかを × で示している。容認できない場合には用法は と となっている。

(73)

		容認度	単一定語	
			疑問語用法	placeholder
単文				×
間接疑問文型複文	疑問文埋め込み	と		×
		か		×
		かと		×
	疑問文回答	と	×	
		か		×
		かと		×
	様態	と	×	
		か	×	
		かと		×
	挿入句	と	×	
		か		×
		かと	×	

次章では、これらの埋め込み文のなかで重ね不定語がどのようなふるまいをするのかを観察していく。

### 5. 引用文中の重ね不定語のふるまい

#### 5.1. 疑問文埋め込みの場合

次の例は情報要求特性を持つ動詞「尋ねた」に不定語が入った埋め込み節が接続するかどうかを調べたものである。(74a)で単一定語がある場所に重ね不定語が入ったものが(74b)である。

- (74) a. 彼はその意見を誰が言ったか(を)尋ねた。  
b. \*彼はその意見を誰々が言ったか(を)尋ねた。

(74)の例を見ると、単一定語の場合には「を」接続が可能な名詞節が、重ね不定語が入った場合には容認できないことがわかる。次に、埋め込み文の意味から不定語の用法を考えてみる。

#### (75)単一定語の埋め込み

- a. 先生が、彼は誰に会ったのか、と生徒に尋ねた。  
b. 生徒は(「山田さんに会いました」/\*「はい、会いました」)と答えた。

#### (76)重ね不定語の埋め込み

- a. 先生が、彼は誰々にあったのか、と生徒に尋ねた。  
b. 生徒は(\*「山田さんに会いました」/「はい、会いました」)と答えた。

(75a)で埋め込まれている文に対する答えとなる(75b)では具体的な情報が応答文中に含まれている。よって、この単一定語は疑問用法であると言える。それに対し(76a)で埋め込まれている重ね不定語の疑問文に対して、(76b)では「YES/NO」で応答している。すなわち(76a)の問いかけは YES/NO 疑問文として受け止められており、重ね不定語は疑問用法では認識されていないことがわかる。さらに、「YES/NO」で返答されるということから、答え手は質問文の命題が完成されており、真偽の問題であると判断していることがわかる。ここから、この場合の重ね不定語は実際には埋められる空所を示すプレースホルダー用法であると考えられる。

- (77) a. 花子は、いついつ先生は来るのか、と尋ねた。  
b. \*花子は、いついつ先生は来る、と尋ねた。  
c. \*花子は、いついつ先生は来るのか尋ねた。

上の例では complementizer 「と」と「か」が併用されている(77a)のみが容認可能となっている。この場合、重ね不定語はプレースホルダーであるので、質問は「YES/NO」疑問文となる。(77b)が容認できないのは、重ね不定語が疑問用法ではないために「か」がなければ疑問の意味を持つことができず、情報要求特性を持つ「尋ねる」に不適になってしまうためである。(77c)で「と」がない埋め込み節は容認されていない。これが動詞の特性によるものなのか重ね不定語の特性なのか見極めるのは、他の観察結果を見るのを待つことにする。

## 5.2. 疑問文に対する回答の場合

次の例は知識の有無、獲得、消失に関する述語、推測、判断、決定に関する動詞に不定語の間接疑問文的埋め込み節が入った例である。(78)においても(74)と同様に、重ね不定語が入った場合には「を」接続が容認されない。

- (78) a. 彼はその意見を誰が言ったか(を)発表した。  
b. \*彼はその意見を誰々が言ったか(を)発表した。

次に、意味的側面からこの重ね不定語の用法を考えてみる。

- (79) a. \*花子は、いついつ先生は来るのか、と発表した。  
b. 花子は、いついつ先生は来る、と発表した。  
c. \*花子は、いついつ先生は来るのか発表した。

唯一容認可能となっている(79b)が表すのは次のような状況である。

- (80) 花子が「先生は、今度の水曜日に来られるそうです。」と朝礼で発表したというとき

(80)においても花子の発表した内容は完成された情報であるので、(79b)はプレースホルダー用法であると判断できる。(79a)「疑問文に対する回答」の解釈ができていないことから、ここでは疑問用法が適用されていないことがわかる。(79c)も同様であるが、complementizer 「と」が入っていないことも述べておくべきである。

## 5.3. 様態の場合

(81)では、動詞「喜ぶ」においては単一定語・重ね不定語ともに「を」が入る場合は間接疑問文的埋め込み節が容認されない。また complementizer 「か」で直接接続する場合にも容認されない。

- (81) a. \*花子はいつ先生が来るのか(を)喜んだ。  
b. \*花子はいついつ先生が来るのか(を)喜んだ。

次に complementizer 「と」が入る場合には次のようになる。

- (82) a. 花子は、いついつ先生が来るのか、と喜んだ。  
 b. 花子は、いついつ先生が来る、と喜んだ。  
 c. \*花子は、いついつ先生が来るのか喜んだ。

complementizer「と」が入った文のみ容認可能になっていることが観察される。(82b)は「と」で直接接続されているので、プレースホルダーの入った心理描写の直接引用的埋め込みであると考えられる。「か」が接続に用いられてる(82a)は疑問用法である可能性もある。しかし(83)-(86)の状況の比較をすると、やはり重ね不定語は疑問用法ではなくプレースホルダー用法が適用されている。よって、この場合も「か」は文をつなぎ疑問を表す complementizer ではなく、感嘆詞「か」であると考えることができる。

- (83) 花子：「嬉しい！先生はいついらっしゃるの！？」  
 (84) a. \*花子は、いついつ先生が来るのか、と喜んだ。  
 b. 花子は、いつ先生が来るのか、と喜んだ。

(85) 花子：「やったあ！3日に先生がいらっしゃるのね！」

- (86) a. 花子は、いついつ先生が来るのか、と喜んだ。  
 b. \*花子は、いつ先生が来るのか、と喜んだ。

#### 5.4. 挿入句の場合

挿入句として使われている場合、その間接疑問節(文)は主文との関わりが全くなく、埋め込み文を括弧でくくっても主文の意味が通る、という特徴があることは4.5.で述べられた通りである。即ち、挿入句は構造的には独立した単文である(主文と構造的関わりが無い)と考えることができる。(87)において重ね不定語が生起できていないのは、重ね不定語が単文中に生起できないという特性を持つためではないかと思われる。

- (87) a. \*ファンは誰々に聞いたのかすでに出口に待機していた  
 b. \*ファンは誰々に聞いたのかとすでに出口に待機していた

#### 5.5. まとめ

第5章で観察された内容をまとめると次の表になる。

(88)

		容認度	単一不定語		重ね不定語	
			疑問語用法	placeholder	疑問語用法	placeholder
単文				×		
間接疑問文型	疑問文 埋め込み	と		×		
		か		×		
		かと		×	×	
	疑問文 回答	と		×		×
		か			×	
		かと			×	
	様態	と		×		×
		か	×			×
		かと			×	×
	挿入句	と	×			
		か			×	
		かと	×			

#### 6. 表から読み取れる重ね不定語の特性

(88)の表から埋め込み節における重ね不定語の特性が見えてくる。第一に、重ね不定語が容認されている全ての場合において complementizer「と」が節の接続に使われているということである。「か」で接続された文が容認されないということが単一不定語とは異なる点であるが、これは次に述べる重ね不定語に疑問用法がない、という特性があることに起因する。

次に、重ね不定語が生起する全ての場合において、用法はプレースホルダー用法であったことから、重ね不定語には疑問用法が存在しない、ということが言える。疑問用法が存在しないため、動詞自体が疑問や質問の意味を持つ場合を除いては疑問の complementizer「か」と共起することができないのである。

第三に、埋め込み節が「と」のみで主文に接続されて容認されている場合には、単一不定語・重ね不定語ともにプレースホルダー用法となるということである。即ち、同じ状況を表す文として単一不定語・重ね不定語は互換が可能となるのは、埋め込み節が「と」で主文に接続されている場合のみということである。その他の場合は「かと」での接続となるため、単一不定語は疑問用法、重ね不定語が容認される場合にはプレースホルダー用法で YES/NO 疑問文の一部を作るため、同解釈にはならない。

以上のことから、本論文では結論として重ね不定語の特性を次の4つにまとめる。

(89) 重ね不定語の特性

- a. プレイスホルダー用法を持つ。
- b. 重ね不定語が生起可能であるためには「と」で接続された引用文である必要がある。
- c. 疑問用法を持たない。
- d. 重ね不定語が生起している埋め込み節が「と」のみで接続されている場合に限り、単一不定語との互換が可能となる。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、指導教官の上山あゆみ先生にはご多忙の中、貴重なアドバイスを丁寧にご指導をいただきました。ここに厚く感謝の意を表します。また、九州大学大学院生の田中大輝氏にも、多大なご協力をいただきました。ここに記して、心より感謝いたします。

## 7. 参考文献

1. 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：株式会社スリーエーネットワーク
2. 稲田俊明(1989) 『補文の構造』東京：大修館書店
3. 江口正(1992) 「間接疑問節と格標識」 『Kansai Linguistic Society 12』(120-129)
4. 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則(2002) 『複文と談話』東京：岩波書店
5. 益岡隆志・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法 改訂版』東京：くろしお出版